九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[31] Crossover

https://hdl.handle.net/2324/21749

出版情報：Crossover. 31, 2012-03. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

CROSSOVER

No.31 March, 2012

九州大学大学院
比較社会文化学府

Contents

巻頭言

比文の本棚と叢書 …… 服部　英雄 …… 1

新任教員紹介

九大百年の預かりもの …… 舟橋　京子 …… 3

自著を語る

『近世分家大名論』『江戸大名の本家と分家』 …… 野口　朋隆 …… 4

『天皇の韓国併合―王公族の創設と帝国の葛藤―』 …… 新城　道彦 …… 6

海外レポート

中国の偉人・歐陽脩の書簡96篇を発見!! …… 東　英寿 …… 8

華東師範大学を訪問して …… 阿部　康久 …… 11

アジア大陸の形成過程解明に向けて―モンゴル野外地質調査― …… 足立　達朗 …… 13

国内レポート

沖縄滞在記―農業と在日米軍基地― …… 西尾　典子 …… 15

あらたな出発

コソボと日本のさらなる関係向上を目指して …… 上村絵里子 …… 17

比文で得たものと今 …… 松﨑　哲也 …… 19

社会人院生コーナー

社会人大学院生の独白 …… 大山　智徳 …… 21

社会人から学生へ、そしてまた学生から社会人へ―人生の繰り返し― …… 金　紅梅 …… 24

大学院データブック …… 25

編集後記 …… 29

表紙の説明

比較社会文化学府の研究・教育のキーワードは、「異なる社会と異なる文化」、「グローバリゼーション」、「地球環境」です。表紙のデザインは、諸問題が地球規模で進行する現代社会を学際的なアプローチで研究している本学府の姿勢を象徴しています。「異なる社会と異なる文化」を繋ぐ言葉をロゼッタストーンで、「グローバリゼーション」を大陸間を渡るカモで、「地球環境」をジグソーパズルの衛星画像で表しています。

表紙デザイン：独立行政法人 国立科学博物館･非常勤研究員　林 辰弥

比文の本棚と叢書

服　部　英　雄
（歴史資料情報講座）

比文言文棟の１階エレベーター前に比文の本棚が設置されてから２年ほどになる。最初は名の通り、本棚らしく背文字だけだったが、途中から、いくつかの本は表紙が見られる配置に換わった。書斎の本棚から書店へ。店主だったらどう本を置くのか。表紙は本の表情である。場所は窮屈になったけれど、比文の活動を示すコーナーだから多少は狭くともにぎやかな方がよい。毎年少しずつ本が増えていく。院生や修了生の著作も増える。卒業生からだれだれさんの本があるけれど、いまどうしてるのですか？と聞かれることもある。比文の歴史でもある。

棚の左上が比文叢書のコーナーである。叢書は比文の学問を「叢書」のかたちで示そうという意気込みで始まった。じぶんは根井豊学府長の時に、図書紀要委員長として、最初の叢書刊行に従事し、何冊かの出版を担当した。いまや叢書も21冊になって、年度末にはまた３冊が増える。叢書は１冊に付きまず大学配布用（多くは大学図書館や各研究室へ公用配布）がある。OPACにて検索すれば200にも近い図書館での全冊架蔵が確認できる。また著者への献本があり（多くは取材協力者や関係機関へ公用配布）、そして書店販売（市販）用が含まれる。市販されることが特色である。一般市民、海外からでも求めうる。学術書で地味な内容だから、売れ行きはさして期待できないとはいえ、いくつかの本が品切れになった。たとえばバールィシェフ・エドワルド『日露同盟の時代　1914～1917年』は、品切れになった後、オンデマンド方式で増し刷りした。正誤を訂正した修正版らしい。書評もいくつか出た。井上奈良彦『議論法　探求と弁論』は刊行時、新聞にも紹介された。比文ホームページに３版とある。金成妍『越境する文学』は賞を２つも、もらった。書評に取りあげられて、受賞もする本はやはり在庫も少なくなっていく。

学府では比文叢書の書評はその都度クロスオーバーに転載してきた。読者拡大の支援は学府の仕事である。版元の花書院も、比文叢書新刊は、かならず雑誌『ＵＰ』（東大出版会）に広告を出し、あと１誌分、著者から指定された

比文の本棚　比文・言文棟１階

○○○ 巻頭言

雑誌に広告を出すと自前で予算を計上している。動きはどれほどか。ネット「日本の古本屋」で「比較社会文化叢書」を検索したら、ヒットしたのは１冊だった。いまの段階ではまだまだ市場には出づらいようだ。

ところでこの文を書くに当たって調べてみたら、叢書のうち上記３冊と、河田和子『戦時下の文学と＜日本的なもの＞』のプラス１冊、計４冊がGoogle Booksで無料閲覧できることがわかった。関係者に聞いたら、著者にも出版社にも了解を得ていないという。Googleが勝手にしていることだそうだ。あたりまえだが、比文にも話しはなかった。Googleは検索をかけた語句が出てくるということらしい。じっさいは相当部分（８割ほどという）が読める。出版物無料公開について、Googleは絶版かつ市販されていない書籍に限定するとしているらしいけれど、実際はだいぶちがう。大学が出している本だから、市販されていないと思われたのだろうか。

苦情を申し入れれば明示が限定されるそうだが、むしろネット公開を喜ぶ著者も多いようだ。エドワルドさんはできるなら修正版をアップしてほしいとのこと。

叢書はすでに24冊に及んで、当初の刊行目的は徐々に果たされつつあるけれど、時代も周囲も変わってきた。ネット上での公開であれば九大図書館のQIRもある。しかしなぜなのかわからないのだが、QIRは検索エンジンでのヒット効率がよくない。QIRまでなかなかたどり着かない。QIRをとばしていきなりPDFに行くこともある。検索エンジンの本職・Google Booksにはかなわない。

院生・修了生にとって本という形での出版はとても意味があるから、いまの支援は続くだろう。冊子体は必要だ。同時に本が多くの人に読まれて使命を果たせるような配慮・努力が必要である。QIRなりGoogle Booksなりで電子図書化を進めるという方向は有力な選択肢だと思うが、支援の形態も徐々に変わっていく。

比文叢書

九大百年の預かりもの

舟　橋　京　子
（総合研究博物館・基層構造講座）

平成23年度の後期から、兼担教員として着任いたしました。普段は箱崎キャンパスの総合研究博物館（旧工学部本館３階）におります。私は2004年の３月に比文の博士課程を退学し、その後一年間21世紀COEプログラム「東アジアと日本―交流と変容―」比文学術研究員として採用していただいておりました。2005年３月に比文で博士号を取得した後も学内他部署において日本学術振興会の特別研究員（PD・RPD）として研究活動を続けながら、研究遂行のためにしばしばひっそりと比文に出没しておりました。このたび、晴れて６年ぶりに公式に比文の一員としての身分を得て、研究・教育活動に携わらせていただけることとなり大変ありがたく思います。

私の専門は古人骨から過去の社会を復元する人骨考古学です。ご挨拶代わりに少しだけ私がこれまで行ってきた主な研究対象である儀礼的抜歯風習の話を紹介させていただきたいと思います。多くの社会には人の人生という一続きの時間を複数の段階に区切るという考え方があります。簡単な例では、「オトナ」と「コドモ」です。この人生の異なる段階への移行の際に必要とされるのが「通過儀礼」であり、民族事例などから「重要視される儀礼」「儀礼の際に強調される社会集団」は社会により異なると予想されます。この観点から古人骨にみられる抜歯風習を主な対象として分析を行い、通過儀礼と社会組織の時間的・空間的変容が密接に結びついていることを明らかにしています（舟橋2010『抜歯風習と社会集団』すいれん舎）。

このようなこれまでの研究において私が分析対象としてきた人骨資料千数百体は、自分が作成した資料はほとんどなく、先行する研究者たちが作り上げ維持してこられた資料です。現在博物館に収蔵されている動物骨格標本・古人骨資料も、まさに福岡医学校時代および本学医学部におられた金関丈夫教授以降様々な研究者により百年かけて収集・維持されてきたものです。それを2004年に比文から博物館に移管されるという形で博物館が預からせていただいているのです。以前、これらの資料に関して「所蔵物」ではなく過去の研究者からの「預かりもの」との表現を耳にしたことがあります。その預かりものの管理責任の一翼を担うというのが私の博物館での仕事の１つです。現在の研究者は勿論のこと百年後の誰かの研究基礎となるデータを作るための人骨資料の作成とその維持のために尽力しています。また、これまで本学の古人骨資料を用いた研究が数多く行われています。それらの研究成果をわかりやすく展示する方法を検討するのも私の博物館での仕事です。「古い資料を収蔵している意味は？」と問われることもあります。そのような問いに対し、過去も現在も資料を用いて学史に残る重要な研究が行われており、大学博物館における資料の収集・蓄積は学問的に非常に意味があるということを学内外の人々に伝えるための良い媒体がまさに研究展示であると考え、展示・普及活動にも勤しんでおります。

比文の教員としては、基層構造講座の学生諸氏とともに、特研や演習はもちろんのこと、毎週水曜日の調査研究方法論では一日中人骨と格闘し、あるときは人骨のX線画像を前に「この骨痛そう」とつぶやいたりもしています。加えて、着任以前から比文の教員を中心に多分野の研究者で行われているプロジェクト『高精度元素・同位体分析システムを用いた原始古代人口移動・物流ネットワークの研究』にも参加させていただいています。比文において研究・教育活動に携われることは私にとっては好機であり、最大限に生かしたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

大分県長湯横穴墓の人骨調査中の著者

舟橋京子2010『抜歯風習と社会集団』
すいれん舎

○○○ 自著を語る

『近世分家大名論』『江戸大名の本家と分家』

野　口　朋　隆
（佐賀大学大学院経済学研究科非常勤博士研究員）

2011年に２冊の単著を刊行した。どちらも吉川弘文館からで、２月に『近世分家大名論－佐賀藩の政治構造と幕藩体制－』、11月に『江戸大名の本家と分家』（歴史文化ライブラリー331）である。１年の内に２冊単著を出したというと、拙速に過ぎる、粗製濫造といったご意見を頂戴してしまうかもしれない。ただ、両書は出版に至るまでの経緯や、分析の素材をそれぞれ別にしている。

【刊行に至る経緯】

まず『近世分家大名論』については、比較社会文化学府で2006年３月に学位を取得した博士論文をもとに加筆・修正を加えたものである。本書は、研究フィールドを佐賀藩鍋島家に設定し、同藩の本家と分家の関係性について、時代による変化や上位権力である幕府に規定された部分を考慮しながら検討を行った。ただ本分家という関係性は大名家それぞれに多様性があることから、院生時代から全国の事例についてなるべく広く収集するように心がけ調査も行っており、この成果が『江戸大名の本家と分家』である。本書は吉川弘文館の歴史文化ライブラリーから出され、一般向けで平易な文章や興味を引きやすい素材で構成されている。しかし前著と問題関心が全く異なっていたり、違う問題を論じた訳ではなく、むしろ両著は密接に関連している。『近世分家大名論』では佐賀藩鍋島家の本分家において発生する様々な諸問題を深く掘り下げ、『江戸大名の本家と分家』では全国の諸大名家における諸問題を通して、広く本分家の動向を近世武家社会に位置付けていくことを意図している。また前著の焼き直しなどではなく、描ききれなかった本分家の関係性について、全国の大名家を事例としてまとめたものである。これらの理由から、この「自著を語る」では二冊とも紹介させていただくことにした次第である。

拙著二冊については、紙幅の関係もあり、以下目次をあげ、両書に通底する研究の目的、成果などをまとめておくことにしたい。

【内　容】

『近世分家大名論』

はじめに

第一部　分家の創出と権力編成　第一章　三家の創出とその存在意義　第二章　幕府権力と三家　第三章　幕藩領主における恩赦の構造と変容　第四章　近世中期鍋島家の本家・分家関係と親類大名

第二部　佐賀藩領内における本分家関係　第一章　「三家格式」再考　第二章　小城郡代と小城郡支配　第三章　小城鍋島家の「与」編成と身分格式の成立　第四章　鹿島鍋島家の吸収合併計画から見る三家の存在形態

第三部　「御家」に対する帰属意識の形成　第一章　『葉隠』にみる「譜代」と「新参」　第二章　先祖の戦功をめぐる「御家」内の動向について

おわりに

『江戸大名の本家と分家』

大名家の本分家関係－エピローグ

第一章　全国の大名家における本家と分家　第一節　部屋住から分家へ　第二節　領知朱印状の拝領をめぐって

第二章　分家をつくる　第一節　分家創出の契機　第二節　家紋が語るもの　第三節　多様な本分家関係

第三章　「同族」関係の維持　第一節　将軍綱吉と本分家関係　第二節　一族としてのまとまり

新しい本分家関係－エピローグ

【研究の目的・意義】

私の研究は藩・大名家に定点を置きながら、近世社会において国家的枠組みであった幕藩関係について分析を行っている。例外もあるが、基本的に分家大名は、本家大名が庶子（実子・養子であったり叔父であったりする）を幕府へ奉公に出し、将軍と主従関係を結び、所領を分け与えるか、もしくは新たに幕府から拝領することで大名化・旗本化していく。こうすることで大名・旗本の総数が拡大していくことから、本分家とは幕藩制下、極めて基本的な親族組織であり、大名家の本分家を分析することは、幕藩関係を考える上で非常に重要である。また佐賀藩鍋島家は国持大名（一国、もしくは同規模を有する大名家のこと）であり、本来徳川家と肩を並べる存在として、その領国では一定度

のまとまりを持った藩政（政治、経済、宗教、軍事、文化など）が展開されていた。このカテゴリーに属する佐賀藩鍋島家の本分家に関する分析を行うことは、国持大名家の特質についても考えることになる。

【研究史上の問題点】

これまで本分家関係に関する研究は、全国の諸藩において行われており、また自治体史のなかでも明らかにされてきた。ただ、これらの研究は個別藩内部での分析に終始していた感が強く、全体史のなかで論じられるということがあまりなかった。特に従来の研究では、将軍から所領を治めていることを認められることを示す領知朱印状を拝領する別朱印分家は本家からの自立性が強く、拝領しない内分分家はこれが低いとされてきた。しかし大名家では本分家が同族として結びつき「家」の存続を図ることも珍しいことではなく、自立的か否かだけでは、大名家の本分家を理解できないと考えた。

【研究成果】

両著において明らかにした点について、以下四点ほどあげておきたい。まず第一に、大名家の本分家では、父系の血統を一にする同族として、両者が互いの「家」の存続を目指しながらも、本分家を合わせたところの鍋島家＝「御家」存続のため、後見（本家による政治的介入を含む）、血統（後継者）の維持、財政援助などを行っていたことを明らかにした。ここでは別朱印・内分といった分家の形態による違いはない。第二に分家大名は本家に従いながらも将軍とも主従関係を有する二重主従制であることを指摘した。主従関係とは、通説的理解では主君と家臣の一対一で成立するものであるが、少なくとも、両書で対象とした近世社会では、将軍と本分家それぞれが主従関係を結ぶ二重主従制が存在していたこと、そしてこの二重主従制によって、幕府は本家を掣肘するとともに優遇していること、本家は分家を奉公させることで将軍への「忠」を示すことになった。そして分家は幕府へ奉公を行うことで大名や旗本の家格を付与されたことを明らかにした。第三に江戸時代の「大名」について、「部屋住格大名」という概念を提示した。一般的に大名とは一万石以上の所領を有し、将軍との主従関係を有している者ということになる。しかし江戸時代の「大名」はこうした存在ばかりではなく、本家から所領を分け与えられている、と幕府が認めれば、実態として一万石以上の所領を有していなくても、大名として存立することができた。そしてこの時重要なのは、江戸において大名が毎月三日、江戸城へ登城して将軍へ御目見を果たす月次の御目見をはじめ、江戸城で行われる将軍との対面儀礼、たとえば一月三が日の年頭、家康がはじめて江戸城に入った日とされる八月一日の八朔などに参加することで、大名としての格式を獲得していくということである。こうした点が一定度の所領を拡大していくことで自ら大名としての地位を手に入れた前代の戦国大名とは異なる点で、近世大名は上位権力である幕府の認知が重要であった。なお、「部屋住格大名」は幕府から命じられる普請役など様々な公儀役を勤めることはない。第四に佐賀藩（本家）が分家を含めた家臣団に対する支配を行うための権威を構築していく上で、藩主家の年忌法要や年譜、軍記物、戦功書といった歴史書の編纂を行うなかで、鍋島氏にとって中世における旧主龍造寺氏と系図を連続させて、藩主としての正統性を担保する系譜認識を有していたことを明らかにした。支配の正当（統）性を構築していく上で、宗教、血統、伝統性が重要な要素となっていたことを指摘した。

○○○ 自著を語る

『天皇の韓国併合―王公族の創設と帝国の葛藤―』

新　城　道　彦
（韓国研究センター）

本書の主要な登場人物は副題にある〈王公族〉である。

王公族とは、韓国併合時に韓国皇室を日本に編入すべく、天皇が詔書を発して創設した身分であり、一般的には李王家と呼ばれている。・・・というように、原稿を書くときには常に決まり文句のように冒頭で説明しなければならないほど、王公族は“マイナー”な存在のため、この用語は主題から副題へと降格になった。しかも、本書は韓国併合によって大日本帝国のなかに天皇と旧韓国皇帝という二人の「帝（みかど）」が併存することになったときに、いかなる葛藤が生じたのかという疑問を切り口にしているため、主題を『天皇の韓国併合』とした。

しかし、今思えばこれが誤算だった。豈図らんや。刊行後に本書の評判をインターネットで調べてみると、前々から王公族について知りたかったという意見が多数見られたのである。しかも『天皇の韓国併合』というタイトルが「左翼臭い」から敬遠したという意見すら目に付いた。

後悔先に立たず。いまさらタイトルを変えるわけにはいかないので、ここからは本書の内容や刊行の経緯について紹介させていただきたい。

◆

植民地研究の重要なキーワードの一つとして帝国がある。帝国とは読んで字の如く「帝が統治する国」を意味する。しかし、植民地研究ではしばしば帝国と帝国主義が混同される。帝国主義とは資本主義国家が政治・経済・軍事などの面で、他国の犠牲において自国の利益や領土を拡大しようとする思想であり、幸徳秋水やレーニンといった無政府主義者・共産主義者によって体系化された。それゆえ、当初は資本主義・軍国主義を否定する文脈のなかで用いられたのであり、「帝」云々とは直接関係ない。

韓国では戦前の日本を指す用語として一般的に「日帝」を使うが、これも日本帝国ではなく、日本帝国主義の略であり、西欧由来の分析枠組みが潜在化しているといえよう。これに対して、本書では「帝が統治する国」という帝国本来の意味に立ち返って韓国皇帝の処遇という側面から朝鮮統治を再考した。

併合時の韓国皇帝の処遇に関する研究は、伝記などが何冊かある程度で、実証的なものは皆無に等しい。1945年の日本の敗戦とその後のGHQによる天皇の取り扱いが活発に研究されていることと比べると、その差は歴然としている。

しかし、だからといって併合時における韓国皇帝の処遇に見るべきものがなかったわけではない。韓国併合は戦争の結果としての占領ではなく、あくまで条約締結交渉を経て成立した。その過程で何とか国の名分を残そうとする韓国側（李完用首相）と、独立の可能性を断とうとする日本側（寺内正毅統監）で乾坤一擲の駆け引きが繰り広げられたのである。その議題の中心が韓国皇帝の取り扱いであった。

日本は韓国併合を国際的な「合意」として実現するために、条約という形式にこだわった。それゆえ、併合条約の第一条と第二条をみると、韓国皇帝が統治権を「譲与」し、天皇がそれを「受諾」すると謳っている。しかし韓国皇帝からの委任を受けた李完用首相が調印に応じなければ、「合意」は成立しない。ゆえに、日本側は韓国政府の要求を聞き入れ、可能なかぎり譲歩して条約調印の意思を引き出さなければならなかったのである。

では韓国政府が条約調印の条件として要求したこととは何だったのであろうか。すなわち、併合後も国の名分を残すために必要なこととは何だったのであろうか。

それは国号と王称の維持であった。国号に関しては、清国から台湾を割譲したときに旧称を残した前例を参照として、日本側は「朝鮮」案を提起した。これに対して、北海道をもじった南海道に変えられるのではないかと心配していた韓国側は、「朝鮮」案をすんなりと受け入れた。

一方、王称に関しては、韓国皇帝を単に「王」として国

内に編入すると、将来的に「朝鮮王」を名乗る可能性があり、朝鮮の統治者は天皇ただ一人であるという大義名分を否定するだけでなく、独立運動に利用される危険性があった。そこで日本側は「王」の頭にあらかじめ韓国皇室の姓である「李」を付けて、「李王」にするという案を提起した。韓国側は「李王」案に不満があるようであったが、それ以上の譲歩は見込めず、ここが妥協点となる。

国号と王称に関する日本側の案を聞いた李完用は、もしこれが実現されるならば、自分は職責をまっとうして閣議をまとめると表明した。ここに至って、日本が李完用内閣との間で併合を実現するためには、国号と王称を韓国側の要求に従って維持することが不可欠となる。李完用首相は、条約締結による成立という日本側の要望に応じるふりをしながら、国号と王称といった「国家」の名分にかかわる問題に関して巧みに譲歩を引き出したのであった。

このように併合条約の締結過程を詳細にみていくことで、韓国併合が一方的な力関係で実現したわけではないことが明らかとなった。なお、韓国で条約締結交渉が進められていたころ、日本では東海・関東地方を中心に死者千人を超す大水害が発生していた。閣僚や枢密院議長は地方に足止めにされ、日本の中枢部は完全に麻痺していたのである。3·11の東日本大震災に匹敵するとまでは言わないが、それに似た状況下で韓国併合が実施されていたことはこれまであまり知られていない。

王公族は皇族の礼遇や天皇家に次ぐ高額の歳費が保障された身分であり、法的に皇族なのか否かは曖昧であった。そのため、1918年には彼らの法的位置づけをめぐって皇室典範まで改訂されることとなる。韓国併合とは大韓帝国を否定すると同時に、大日本帝国の根幹にある皇室制度に変容を迫るものだったともいえよう。本書は植民地研究で決して主流とは言えない王公族という視点から朝鮮統治を論じることで、歴史に埋もれた事実を少なからず発掘したつもりである。

◆

さて、本書の構成は2010年３月に提出した学位請求論文がもとになっている。本学法学研究院の岡崎晴輝先生のご推薦により、法政大学出版局（サピエンティア叢書）から刊行する幸運に恵まれた。岡崎先生には改めて御礼申し上げたい。

博士論文の執筆から本書の刊行まで、決して順風満帆だったわけではない。学部時代には経済学部に属し、ヘーゲルの『精神現象学』や『法の哲学』をテキストとする経済学史を専攻したので、大学院に進学するまでは歴史学とほぼ無縁であった。しかも王公族は先行研究がほとんどないため、一から手探りで史料を探し求めなければならなかった。たとえ史料を見つけて論文を書いても、学会誌からはリジェクトされてばかり・・・。とにかく袋小路に迷い込んでいく不安のなかで研究を続けていた。

自分の進む道が決して行き止まりではなく、暗闇の先にかすかな光が差し込んでいると知ったのは、2009年、つい最近のことであった。王朝という側面から東アジアの近代史を考察するときに王公族という旧韓国皇室の存在が重視され、シンポジウムや学会に呼ばれるようになったのである。

2010年に菅直人首相（当時）が宮内庁所蔵の朝鮮王朝儀軌を韓国に「引き渡す」と宣言したときには、NHKの要請で儀軌に関する共同調査に参画した。そして、なぜ儀軌が宮内庁に所蔵されているのかその移管経緯を追った。共同調査の様子は全国放送され、むさ苦しい顔を世間に晒すことになってしまったが、番組内容については一応の反響があり、本年10月には書籍化もされた。

王公族は韓国併合100年に当たる2010年に合致するテーマであり、それなりに注目された。当然ながら、研究者は常に社会に目を向け、「問い」を立てなければならない。意味ある「問い」を立てるか、自己満足で終わるか、そこに研究者とオタクの違いがあると思う。

次なるテーマは、同じく2019年に100年目を迎える３・１独立運動か・・・。それはさておき、10年先の潮流を視野に入れた研究スタイルは、今後も続けていきたい。

NHKとの共同調査の内容を書籍化。
論考「韓国併合と王公族の創設―永遠に続く朝鮮統治の基盤づくり―」と、コラム「王公族は創氏改名した？」を担当。

海外レポート

中国の偉人・歐陽脩の書簡96篇を発見!!

東　英寿
（文化表象講座）

私は、中国・北宋時代（960～1127）の文人であり、官僚・政治家でもある歐陽脩（Ouyang Xiu）という人物を主な研究対象としており、今回、中国でも台湾でも日本でも全く知られていない、大胆に言えば世界で誰も知らなかった歐陽脩の書簡を96篇も発見してしまった。その学術上の意義については学会誌に発表する予定で、本稿では詳述しないが、その発見がマスコミに取り上げられて日本全国に伝わり、さらに中国においては新華社を始めとする報道機関に取り上げられ、凄まじい反響があったので、そのことを中心として本稿で報告したい。

歐陽脩は、西暦1007年から1072年までを生きた人物で、彼の詩文は中国では中学、高校の教科書に取り上げられ、ほとんどの中国人が知っている偉人だと言ってよい。千年以上前に生まれており、既に中国文学史上においても評価が定まっている人物である。彼の生きた時代から日本を見てみると平安時代にあたり、ちょうど紫式部の頃である。朝日新聞社の記者から、今回の発見を日本でたとえるとどういう感じですかとたずねられた際に、「もし紫式部の『源氏物語』に、全く知られていない新しい帖が出てきたとしたら、我々日本人は非常に驚くでしょう。その発見は日本文学史に多大な影響を及ぼすこと間違いありません。今回の歐陽脩の書簡96篇の発見は、それと同じような衝撃を中国に与えることになると思いますよ」と紫式部を例に出して答えたこともあり、今回の発見は後に女性向けサイト「楽天ウーマン」にも掲載されることとなった。

2010年６月に、私はこれら96篇の歐陽脩の書簡を発見した。マイクロフィルムからコピーして入手していた、天理図書館所蔵で国宝指定されている歐陽脩の全集『歐陽文忠公集』153巻の中から、違う研究テーマを追いかけていた時、偶然に見つけ出したのであった。しかし、千年以上前に生まれた人物の未発見書簡が新たに出てくるという可能性はゼロに等しいので、まだ全く確信が持てず、2010年８月に中国北京の国家図書館に出かけ、詳細な調査を行った。その調査を経て、これら96篇の書簡は未発見のものであることは確信したが、なぜこれまで発見されなかったのかということを解明するために、その書簡の流伝状況や版本等の補充調査を行い、確実に証明できるという手応えをつかんだのは2011年３月頃だった。その成果を2011年10月８日の日本中国学会で研究発表したのであった。

事の発端は、10月３日に九大広報室が今回の発見をプレスリリースしたことに始まる。プレスリリースをいつするかについて、私は全く知らなかったが、当日朝９時前に大学へ行こうと家を出る時、携帯電話をみると数件の見知らぬ番号からの着信。そのうちの一つに電話してみると、日本経済新聞社の記者からで、歐陽脩の書簡の件について話を聞かせて欲しいとのことだった。私は約１時間、電話取材に応じた。その後、車で大学へ向かう途中に、携帯が鳴り、出ると西日本新聞社の記者からで、11時から研究室での取材を約束し、さらに讀賣新聞社の記者からも電話があり、車の運転中だと返事をすると、大学に到着する頃に再度かけてくるとのこと。大学に着くと、直ぐにこの讀賣新聞社の記者から取材の電話、約30分間話をした。11時には西日本新聞社の記者が約束通り研究室に来たので、発見の経緯を１時間ほど説明し、記者は私の写真を撮って帰った。取材の間にも研究室の電話や携帯が幾度も鳴ったので、西日本新聞の記者に電話に出てよいですかとたずねると、西日本の取材を優先させてくださいとのことで、鳴り響く電話はそのままにしていた。取材が終わると、休む間もなく毎日新聞社の記者からの電話取材が約50分。すでに12時50分過ぎで、私は３限目の授業に向かう時間だった。昼食を食べる時間もなく、研究室を出ようとすると、朝日新聞社の記者からの電話。研究室に取材に来る時間を午後４時に約束。この日、私は３限目、４限目が授業であったが、後期の第１回目の授業日だったので、４限目を少し早めに切り上げて、４時からほぼ１時間、朝日新聞社の記者の取材を受けた。５時を過ぎると、今度は時事通信社の記者から取材の電話。今日は同じ事を何度も説明するので、この頃になると自分でもかなり要領よくまとめて話ができるようになっていた。６時半頃には、今度は共同通信社の記者からの電話。それが終了したのが７時半頃。疲

れてしまい、帰宅しようとすると、朝日新聞の記者が確認の電話。さらにこの記者は、帰宅後の午後11時過ぎ、それから11時40分頃にも確認の電話をかけてきた。マスコミの取材のすごさを痛感しつつ、こうしてプレスリリースされた１日が過ぎ去った。

翌日（10月４日）、朝日新聞、毎日新聞、西日本新聞等に記事が掲載され、特に西日本新聞は私の写真まで掲載されており、昨日の取材がこのような形で記事になるのかと実感した。

九大・東教授 原本から突編

欧陽修の書簡"発掘"

中国・宋代屈指の文人

「人柄知る資料に」

（2011年10月４日　西日本新聞）

いち早く記事を掲載したのは、10月３日のプレスリリース当日の日本経済新聞の夕刊で、一方讀賣新聞は２日遅れの10月５日の朝刊に記事が掲載された。時事通信や共同通信で配信されたことにより、多くのネットにも記事がでた。たとえば国宝ニュースや47ニュース、時事ドットコム、海外情報ニュース、サーチナ、レコードチャイナなど。さらに、私の記事が引用されて２チャンネルで1000件以上のスレッドが立っていることに気づいたときには、驚きを超えて恐怖すら感じた。その多くは、中国の偉人の作品がなぜ日本で発見されたのか、それは歐陽脩の全集を戦争中に日本が略奪したものに違いないという、でたらめな書き込みに基づくものが多く、とにかく今回の発見が愛国心に火をつけた形になったようだった。

これら日本での新聞記事が一段落した10月５日、突然中国のテレビ局・中央電視台の東京支局長から私へ一本の電話がかかってきた。北京の本社からの指示で、10月８日の日本中国学会での私の研究発表を、テレビカメラを入れて取材させて欲しいという打診であった。中央電視台は日本で言えばＮＨＫに相当する放送局である。私は学会での混乱を避けるため、また私には取材許可の権限がないので、丁重にお断りした。ただ、中国の放送局が、なぜ今回の私の情報を知っているのかと疑問に思ったので、ネットで検索すると、なんと中国国営通信の新華社が、私の発見の記事を配信していることに気づいた。

日本"发现" 欧阳修书信

（2011年10月５日　新華社記事及び日本語訳）

新華社が配信したことにより、長江日報、遼寧日報、広州日報、瀟湘晨報、陝西日報、羊城晩報、香港文匯報等の中国や香港の多くの新聞に転載され、ネットにも数多く記事が引用されて、今回の発見は中国で多大な反響を巻き起こしていた。その後もネットでは、多くの記事が掲載されて、たとえば11月15日の人民網では「国宝級文物歐陽脩96篇書信現日本」（国宝級の文物である歐陽脩の96篇の書簡が日本で現れた）と題して特集も掲載された。

10月８日の研究発表当日は、日本の新聞に大きく記事が掲載されたので、多くの研究者が私の発表を聴きに来て、準備したレジュメも不足してしまった。発表が終わった翌日、今度は人民日報の東京支局長から取材の申し込みがあり、10月14日に九大の広報室の段取りにしたがい箱崎の

本部で取材を受けた。この記事は11月14日の人民日報に掲載された。

当初、これ程まで中国で反響があると予想はしていなかったが、これらの96篇の書簡の発見について、学会発表後に多少は中国の学者から私のところに問い合わせがあるだろうと思っていたので、96篇の書簡について中国での公開も考えていた。私は、学会発表のひと月前頃に中国の知り合いの学者に96篇の書簡発見について連絡し、学会発表後に中国の雑誌への掲載を依頼した。しかし、全く掲載雑誌が決まらずにいたところ、新華社の報道等で中国で一気にこの発見が知れ渡った10月５日の夜に、上海の『中華文史論叢』という雑誌の編集者から、本当に原稿を出してくれるのかという問い合わせがあった。さらに翌日には、できるだけ早い号に掲載する方向で、すでに決まっている原稿と差し替えますという連絡まで来た。マスコミの威力は絶大で、報道によって手のひらを返したような反応になるのだなあと痛感した。人民日報の取材の際には、96篇の書簡を『中華文史論叢』2012年第１期で公開しますということを話したので、この雑誌名も記事として掲載された。中国共産党の機関誌で、権威のある人民日報に掲載されたことにより、以後『中華文史論叢』の編集者も相当な力を入れて原稿を校正してくれるようになった。12月には、政府系の新聞で中国の知識人や文化人向けの光明日報の東京支局長が取材に来た。研究室で取材を受けたので、記者には実物の資料を見せることができ、より具体的に説明できた。この記事は、研究室に所蔵の資料とともに2012年１月７日の光明日報に掲載された。

また、今回の発見について、中国天津市にある国家重点

国际教科
聚散匆匆一千年
文脉绵绵两国间

（2012年１月７日　光明日報）

大学の一つである南開大学から招待講演の依頼も来た。中国や台湾、マレーシアの学者からも問い合わせのメールが多数届いた。とにかく、このように中国での反響は凄まじいものであり、これは千年以上前に生まれた歐陽脩という偉人の未発見書簡が存在していたという事実への驚き、しかもそれが96篇も大量に出てきたという衝撃、さらに本場の中国ではなく日本から出てきたという意外性、これらが合わさって巻き起こされたのだ思われる。

さて、2011年３月に、これら96篇の書簡の発見についての論証の目処がたったので、私は４月からの新学期、比文での東アジア文化論の授業で、この書簡を取り上げて読むことにした。その際、出席の院生に「これらの書簡は日本の他のどの大学でも講義はされていないし、たとえば中国の清華大学や北京大学などの一流大学でも全く取り上げられていないもので、わかりやすく言えば世界で初めてとりあげるのが、ここ比文での授業ということになります。皆さんが世界で初めて読むのですよ」と説明して読み始めたが、何せ書簡というのは当時の人間関係や状況が分からないと、意味をとれないところが多々あり、「ここはわかりませんね」など苦心惨憺しながら、ともかく授業を展開した。たとえ少々意味が分からないところがあっても、まだ知られていない中国の偉人の書簡を、世界で初めて読み解いていくというのは、私にとっては実に爽快で、学問の醍醐味はまさにここに凝縮されているなあと実感した。最初、戸惑っていた院生も次第に慣れてきて、発見の報道が出た後、中国人留学生から「中国の友達から、あの96篇を発見した先生から学んでいるのはすごいというメールをもらいました」という話を聞くと、私はただただ戸惑うばかりで、改めて今回の報道が留学生の友人にも浸透する程、中国では関心深いものだということを実感した。ともかく、こうした形で比文の授業にも大いにフィードバックできたことにより、今回の発見は教育方面においても非常に良い影響を与えたと思う。

前述したように、私が今回発見した書簡96篇を断句して句読点をつけ整理した原稿が、2012年３月に『中華文史論叢』で初めて公開されるので、今後はこの書簡の内容の研究が進むと考えられる。歐陽脩を研究している私は、今回96篇の書簡を発見したことによって、その研究史に名前を刻むことができたとすれば、これほどの喜びはないと感じている。

華東師範大学を訪問して

阿　部　康　久
（地域構造講座）

「中国の大学と交流するのなら、まずは近い大学にしましょう！近くで便利なので、継続的な交流ができますよ」。

私が今回、華東師範大学外国語学部日本語学科（以下、華東と略す）に招聘され､特別講義をさせて頂くことになったのは、本学府の東寿英先生から声をかけて頂き、昨年11月に開催された同大学との合同シンポジウム「日本と中国―個人・社会・文化―」に参加させて頂いたことがきっかけになっている。

冒頭の言葉は、そのときに東先生がおっしゃった口説き文句である。もちろん、華東を交流相手に選んだ理由は、他にもいくつかあるのだが、福岡空港から上海浦東空港に降り立ったとき、この言葉の意味を実感することができた（恥ずかしながら当方、福岡から上海に赴いたのは今回が初めてであった）。福岡から上海までの正式な運行時間は１時間35分であるが、実際にはそれより早く到着することも多いとのことである。上海は大都会なので空港での入国手続きや大学や宿泊施設にたどり着くまでの時間は結構かかるのだが、それでもホテルに到着するまでは、あっという間だった。時間的には福岡から東京に行くのと変わらないという計算は決して机上の空論ではなかったと言える。

さて今回の訪問は、華東側の「訪問専家」招聘制度を利用させて頂き、2011年９月17日から25日までの日程で実施させて頂いた。華東の場合、教授の先生には毎年１名の外国人講師を招聘する権利があるとのことである。今回は、窓口となった潘世聖先生（比文第２期生に当たられる方）の御尽力にて、服部英雄研究院長と典子夫人に加えて、そのお世話役を兼ねて私も訪問させて頂くことになった（他の教授の先生から１名分の権利を譲って頂いたそうで、私のような若輩者に貴重な枠を使わせて頂くのは恐縮だったのだが）。さらにタイミングが良いことに、国際学会にて発表されるために、ちょうど中国を訪れておられた東先生にも、飛行機の乗り継ぎ時間を調整して頂き、一緒に華東を訪問してもらうことができた。

中国側からみると、服部研究院長が自ら出向いて来て下さったということは重要なことのようで、大変な歓迎と厚いおもてなしを受けた。当方としては、毎日のように歓迎会や送別会、観光地への案内などをして頂くのは申し訳ないと感じたので、恐縮しながらもある程度は辞退させて頂いたのだが、それでも先方の先生方には多くのお時間と労力を使わせてしまったようである。

また特別授業は９月21日に実施されたのであるが、それ以外の空き時間については、基本的には自由に使うことができたので、研究のために上海や近接する浙江省に調査に出かけたり、夜には懇親会に誘って頂いたりしていた。特別授業の翌日の22日には、潘先生に大学のバスをチャーターして頂き、蘇州の街を案内してもらい、同地の歴史や地理、文学に関する見聞を深めることができた。来年度以降も比文の先生を招聘して下さることが可能とのことなので、他の先生方にも、是非とも同大を訪問して頂けたらと感じた次第である。

（蘇州見学会の際に）

○○○ 海外レポート

以下では、実際の授業の内容や学生の反応についても紹介させて頂きたい。服部先生と私の授業題目はそれぞれ「熊野道の貴と賤」「日本における中国人留学経験者の就職と定住」というものであった。この特別講義は、授業の単位にはならないので、それほど多くの参加者が来ることはないだろうと聞いていたのだが、当日は50名程度の学生と数名の先生が聴きに来て下さり、大変な盛況で用意していた資料が不足する程であった。専門性の高い内容を日本語で話したにもかかわらず、受講者や先生方からは多くの質問やコメントを頂き、同大学の教員・学生の学術面あるいは語学面での水準の高さを理解することができた。

（特別講義の様子。受講生は学部３・４年生が中心だったが、熱心に聴講してくれ、多くの質問が寄せられた）

（外国語学部前にて。左から潘先生、服部先生ご夫妻、東先生、副学科長の高寧先生、阿部、大学院生）

なお筆者は華東訪問から帰国した後、11月上旬にも、他の調査のため上海を訪問する機会があった。他大学の研究者が行っている科研の調査に分担者として参加したもので、上海で働く現地採用日本人の動向と意識についての調査であった。調査では、実際に現地採用の日本人へのインタビューを実施する必要があったのだが、潘先生と同大学の日本人教師である前川先生、岩佐先生に対象者を紹介して頂く等、多くの御助力を頂いた。

この件も含めて、今回の上海訪問では、潘先生を含めて陸留弟学科長、高寧副学科長、唐権先生等、華東側の多くの先生にお世話になった。この場を借りて心から御礼を申し上げたい。

なお、華東とは来年度以降も学術交流を継続していく予定なので、多くの方々に御参加して頂ければ幸いである。

アジア大陸の形成過程解明に向けて―モンゴル野外地質調査―

足　立　達　朗
（地球変動講座・学術研究員）

約46億年といわれる地球史の中では、数億年に一度、地球上の大陸が衝突・集合することで巨大な１つの大陸、すなわち超大陸が形成されてきたと考えられている。また超大陸の形成は、地球内部や表層環境に大きな影響を与え、生命の進化にも密接な関係があることが提唱されている。現在の地球において、最大の面積を持つ大陸はアジア大陸であり、いまなお複数の小大陸の衝突・集合が進行中であることが近年明らかにされてきた。このことはアジア大陸を「現在形成されつつある超大陸」として見なせることを意味している。すなわちアジア大陸に分布する岩石は、超大陸の形成・進化の過程を解明する鍵となることが期待できる。

アジア大陸中央部地域には、シベリア、バルティカ、北中国、タリムの各地塊が分布し、その集合域は中央アジア造山帯と呼ばれる大規模な変動帯として一括されてきた。しかしこの変動帯を提唱する基礎は、古典的な分析手法とプレートテクトニクス以前の理論に基づいているため、その実体はよく解かっていない。そのため、比文に設置されている最新鋭の分析装置群を駆使した岩石学的・年代学的手法と最新の知見に基づいて、この変動帯の解析・解釈を行うことで、新たな地質学的位置づけを提唱することが必要である。モンゴル地域は、アジア中央部の変動帯の中核をなす地域で、その野外調査を地球変動講座・小山内教授の研究グループでは2009年から継続実施している。本稿では2011年のモンゴル野外調査の様子を、キャンプ生活を中心にご紹介したいと思う。

2011年の調査は８/14から９/ ４の約三週間にわたって行われた。調査隊のメンバーは、九州大学、山口大学、静岡大学の研究者、大学院生からなる国内組7名に加え、タイ・チュラロンコーン大学の研究者１名、モンゴル科学技術大学の研究者、学生計３名と現地のドライバー３名の計14名であり、国際色豊かな大所帯であった。

調査地域は主にモンゴル北東部のセレンゲ地域、中央北部のフブスグル地域と中央部のアルハンガイ地域であり、１年目の西部地域、２年目の中央南部地域の調査とあわせ、モンゴルの変成岩分布地域を網羅することができたことになる。モンゴルでは数本の幹線道路を除き、ほとんどの道路が未舗装である。また調査の対象が一般道のない山岳地帯のため、まさに「道なき道」を突き進むことになる。四輪駆動車の性能を最大限に駆使して山稜や渓谷を走り、時に河川を渡ることもあれば、砂漠を走破することもある。2011年の総走行距離は約3300kmとなった。

夏のモンゴル北部地域は、日中は25℃前後で乾燥した気候のため快適に過ごすことができる。しかし朝晩は氷点近くにまで冷え込む。そのため夏といえども使用する装備は日本の冬山で使用するものを持参する必要がある。

調査隊の集合写真

調査スタイルは大型四輪駆動車３台を用いたキャラバン方式である。自然豊かで人口が少ないモンゴルでは、大きな町の郊外に出てしまうと、小さな宿が極わずか存在するのみである。そのため、特に山岳地域ではキャンプを多用する。また、食料や水、燃料が入手できる町は限られており、時には数百kmの間、町がないこともある。そのため調査の行程に基づいて非常食を含めて数日間分の水と食料品を購入、携行する。これはかなり大量の物資であり、例えば水だけでも１日１人４リットルの水を消費することを考えると、５日間だと隊全体で280リットルとなり、２リットルのペットボトル140本分になる。食料は長期保存のできるものを選択するため、根菜類、乾麺、米、ハムやチーズ、缶詰が中心である。

○○○ 海外レポート

モンゴルでは肉が主食であるため、牛や羊の肉を市場で大量に購入した後、保存が利くように塩炒りして携行する。これらに少々のきゅうりやトマトなどの生鮮品が加わる。このほかに、テントや調理器具をはじめとする生活用品、個人の装備品などがあるため、大型四輪駆動車もすぐに満載になる。

キャンプ地での一日はおおよそ６時前後から朝食の準備で始まる。朝食はだいたい決まって数枚のパンとハム、卵焼きである。朝食後、今日一日の調査予定の確認、前日に採取した岩石試料の整理と輸送用の袋詰めや計量を行い、テントを撤収して９時前後に調査に向かう。

調査は露頭（野外で岩石が露出している場所）を探すところから始まる。モンゴルは非常に乾燥した気候ゆえ、植生に乏しく、岩石の露出状況は極めて良好である。山岳地域に入れば、数十ｍ規模の大断崖も珍しくなく、地球のダイナミックな営みを目のあたりにすることができる。

野外調査の一幕。露頭を観察する研究者達が小さく写っている。日本では見られないような大露頭が数多く存在する。

露頭に到着すると、岩石の種類、産状、構造などを丹念に観察、記載し、地質学的な解釈を議論する。同行した大学院生には調査を分担するとともに、野外での観察に関して細やかな指導がなされる。観察と記載が終わった後、ハンマーで露頭を叩き、岩石を採取する。2011年は81地点でおよそ500試料を採取し、その総重量は約600kgであった。採取した岩石は現在鋭意解析中である。

夏のモンゴルは日が長い。20時近くまで明るいため、通常19時程度まで調査を行う。山岳地域では、調査終了後キャンプサイトを探し、テントを設営して夕食の準備に入る。食事は降雨の場合を除き、野外で摂る。ランタンの光に照らされ、趣きのある雰囲気である。献立はうどんやマカロニが入ったモンゴル流の野菜スープ、あるいはピラフが一般的だ。数日おきに、日本から持ち込んだ食材で料理を振舞う。モンゴル人のメンバーにはカレーが非常に好評であった。聞いてみるとカレーはモンゴルでほとんど出回っていないらしい。美味しい料理に舌鼓を打ちながら、一日の成果について話に花を咲かせると、あっという間に時間が過ぎてゆく。夕食は満天の星空に囲まれたころにお開きとなり、各自のテントに入って就寝となる。

野外調査法の指導風景

この３年間の野外調査とその後の室内分析によって、モンゴルの地質について新たな知見が得られている。これまでアジア大陸中央部は、大規模な一連の変動帯として認識されてきた。しかし詳細な年代学的解析の結果、少なくとも約２億８千万年前と約５億年前という、時代の異なる２つの変動帯が分布することがわかってきた。またそれら２つの変動帯は、時代だけではなく、岩石が記録している温度や圧力の変化の履歴も異なっている。このことから、モンゴルの地質の解析によって、アジア大陸中央部における変動現象の変遷を数億年のスケールで追跡できることが期待される。今後これらの解析結果をさらに精密化するとともに、調査対象をロシアに拡張し、アジア大陸形成過程の実体を解明していく。

道端で休憩するラクダ達。時折出くわす動物たちもモンゴル調査の楽しみの一つである。

沖縄滞在記―農業と在日米軍基地―

西　尾　典　子
（日本社会文化専攻）

2011年９月初旬、私は沖縄を訪れた。９月８日から９日の２日間にかけて開催される政治経済学・経済史学会の九州部会に参加するためである。この学会の理事は九州大学経済学研究院の深川博史教授が務め、幹事は熊本学園大学経済学部の山内良一教授と九州大学経済学研究院の北澤満准教授が務めている。通常、九州部会は九州内の各大学の持ち回りによって開催されているが、この度は沖縄国際大学の来間泰男名誉教授の御好意により、初の沖縄での開催となった。そのため、九州各県から大挙して沖縄に押し掛けることとなった。

私は、学会の前日に福岡空港発・那覇空港着の飛行機を利用して沖縄へ入った。周知のとおり、那覇空港は米軍と共同で利用されている空港である。そのため、飛行機の離発着には時間が掛かる。私は旧日本軍と戦争についての研究をしているため、以前、沖縄へ戦争遺跡の調査で赴いたことがある。その折にも、飛行機が着陸するまでには相当の時間を有し、着陸時には滑走路の横に並ぶ無数の軍用機が目に入ったことを記憶している。

この日も、飛行機は着陸の順番を待つべく、沖縄南部に広がる紺碧の海上を旋回していた。その徒然に、私は窓の外に広がる海の色に目を奪われていた。そうしていると、見慣れないかたちをした構造物が視界の隅に映った。よく見てみると、それは引き波を立てながら動いていた。暫くして私は、それが航行中の空母であることに気が付いた。実際に動いている空母を上空から見るのは初めてであり、記録映画を見ているような気分であった。私が不思議な気分に浸っているうちに、飛行機は軍用機の並ぶ滑走路へと降り、那覇空港に到着した。

沖縄へ到着した翌日は学会の開催初日であった。その日、私たちは会場となる沖縄産業振興センターに向った。会場に到着して空を見やると、３機の戦闘機が編隊を組みながら飛んでいた。米軍の訓練飛行であろう。自衛隊基地の航空祭以外での編隊飛行を見るのは初めてであり、しかもそれを目撃した場所が学会会場であることに少なからぬ驚嘆を覚えた。私はこの最初の２日間で、沖縄の日常の一部に軍事が存在していることを思い知らされたのである。

この日の研究発表は、前半が北澤満先生と白岩氏との共同研究の成果報告であり、後半が来間泰男先生の報告であった。来間先生は、生涯にわたって戦後の沖縄農業を研究されており、農業が抱える問題について詳しい。私の故郷は、亜熱帯気候の沖縄とは異なり、意外に雪が深い寒村である。現在では、過疎化が進み、人手不足から休耕地となっている田畑も散見される。私自身も若き日には父と共に土の匂いに親しみ、家族の血肉となる食料を作っていた。農業とは人の命へとつながるものであるとの思いも強い。そのため、現代の農業が抱える問題についての御報告は、私自身には何が出来るのかと問われているようで、とても興味深いものであった。

報告が終った後は、皆でタクシーに分乗して国際通りを目指し懇親会と相成った。翌日が、本学会の目玉の一つである在沖縄米軍基地の見学会ということもあり、酒量を抑えようとも思っていたが、その野望は泡盛の前に脆くも崩れ去った。気が付けばしっかりと二次会にも参加し、故・筑紫哲也も御用達だったという来間先生行きつけのスナックで、ママさん自慢の沖縄おでんを肴に飲めや歌への宴会を続けていた。酒というのは恐ろしいものである。その後は、３次会に散って行く先生方を見送り、私は宿に帰って飲み直した後に床に入った。朝まで飲まないとは、自制心が育ったものだなどと考えながら眠りに就いた。

翌９日は、朝８時に沖縄とまりん（泊港）前に集合した。沖縄とまりんとは、フェリーのターミナル港であり、ここから渡嘉敷・阿嘉・座間味・粟国・渡名喜・久米・南北大東などの離島への往復便が出ている。午前８時のとまりんは、すでに島への往復客で賑わっていた。我々はフェリーには乗船せず、来間先生が手配して下さったマイクロバスに乗り込んだ。この日は、沖縄国際大学・普天間飛行場・嘉手納飛行場などなどの見学へと出掛ける日程だった。泡盛がよい酒だったのか、はたまた二日酔いになりにくい体質が幸いしたのか、朝はすっきりと目醒め８時前には集合場所に到着することが出来た。バスの中が微妙に酒臭かったが、見回しても

誰も辛そうな顔をしていない。恐らく飲み明かした元気な先生がいらっしゃったのであろうが、それでも集合時間に遅刻した人は誰もいなかった。この日ほど、「九州の人は本当にお酒が強いんだなぁ」としみじみ感じたことはなかった。

バスの中では、来間先生御自身がアジア・太平洋戦争期に体験されたことや、戦後の在沖縄米軍基地についてのお話を聞かせていただいた。来間先生は沖縄の御出身であり、太平洋戦争の末期の少年期には、熊本へ疎開していたとのことであった。激戦地となった沖縄からの疎開については、対馬丸の沈没事件が有名であるが、当初来間先生も対馬丸に乗船する予定であったらしい。しかし、来間先生は他の船に乗ることとなり、無事に九州へ疎開出来たとおっしゃっていた。また戦後の沖縄についても、来間先生のみた米軍の統治下から本土復帰に至るまでの経緯を御教示いただけた。興味深い御話に耳を傾けていると時間の過ぎるのは早いもので、バスは名護市にある沖縄国際大学に到着していた。

沖縄国際大学は、来間先生が教鞭を執っていらっしゃった大学である。そしてこの大学は、2004年８月13日に米軍のヘリコプターが墜落した現場でもある。沖縄国際大学の目の前には普天間飛行場があり、大学の屋上からは普天間飛行場の滑走路や格納庫などが見渡せる。残念ながらこの日は、事前に屋上から見学する許可を得ていなかったため、屋上手前の踊り場から普天間飛行場を見渡すこととなったが、眼前に現れた広大な航空基地の敷地に息を飲んだ。

その後、外へ出て米軍ヘリコプターの墜落跡地を見学した。現場となった場所は改修工事がなされ、現在では白色の地面に舗装されている。しかしここには、墜落したヘリコプターのプロペラで抉られた壁や、黒く焼け焦げたアカギの幹がそのまま遺されており、事故の語り部となっている。この時、沖縄の気温にふらふらしていた私達の傍らで、「普天間は世界一危険な飛行場なんだよ」と呟いた来間先生の言葉は忘れ難いものであった。

※写真は、沖縄国際大学のヘリ墜落現場に焼け残ったアカギを写したものである。右の写真奥の白色の壁には、ヘリコプターのプロペラで抉られた黒い傷跡が残されており、事故現場の凄惨さを伝えている。沖縄国際大学の周りには住宅地が広がっており、普天間飛行場はその目と鼻の先に立地している。（写真撮影：北澤満先生）

コソボと日本のさらなる関係向上を目指して

上　村　絵里子
（コソボ大使館）

私は現在、駐日コソボ共和国大使館で大使秘書として働いています。コソボは2008年２月に独立したばかりのヨーロッパで最も新しい国です。日本は同年３月にコソボの独立を承認し、コソボ大使館は2010年７月に東京に開設されました。コソボ共和国特命全権大使のサミ・ウケリ大使は今年で39歳と、駐日大使の中でも非常に若い方です。それもそのはず、コソボでは国民の70%以上が30歳以下、平均年齢が26歳と、国家が若いだけでなく、国民の大半が若者なのです。

私が大使館で勤務を開始したのは今年の５月でした。３月に発生した東日本大震災の影響で、多くの在京大使館が閉鎖しており、コソボ大使館も例外ではありませんでした。その後、大使館業務が再開されると共に、私の人生初めてのキャリアがスタートしました。

中心がウケリ大使、左隣が在フランクフルト日本総領事、大使の２人右隣が在フランクフルト・コソボ領事、右端が筆者

私が働き始めて最初に目にしたのが、日本の被災地へ支援の意を表明したコソボに対する、被災者の方々からのお礼状でした。コソボは1990年代の紛争期に日本からの多大な支援を受けており、日本の災害は人ごとではないと、３月の震災後の日本にいち早く支援を申し出た国のひとつでした。また６月には、コソボの首都・プリシュティナにおいて、日本を励ますためのメモリアル・コンサートが開かれました。そのコンサートには大統領も出席され、日本語で「絆」と大きく書かれた垂れ幕の前で、日本へのお見舞いの言葉を述べられました。

コソボは人口220万と小さな国ですが、コソボの人々の心には、自らの困難期に手を差し述べてくれた日本への感謝の気持ちがいまだに強く残っています。ただ残念なことは、日本ではコソボの知名度があまり高くないということです。遠いヨーロッパの小国で、日本を思ってくれている人々がいる、このことを一人でも多くの日本人に知ってもらうため、この記事の掲載を新聞社にお願いしました。そして数社の新聞社がこのコンサートの記事を掲載してくれることになりました。実際に紙面に載った記事を目にしたときは、なんとも言えない達成感のようなものを得たことを覚えています。

私たち大使館の最も重要な使命のひとつが、コソボという国について、より多くの日本人に関心を持ってもらうということです。しかし、その大きな弊害になっているのが、日本人の中でコソボ＝紛争＝危険だという固定観念が定着してしまっていることです。現在のコソボでは、国内整備も着々と進んでおり、また外資の受け入れをさかんに行うなど、あらゆる面での発展が見られます。街の中心にはお洒落なカフェが立ち並んでおり、若者が多いこともあり、とてもにぎやかな雰囲気です。

日本におけるコソボのマイナスなイメージを払拭し、真のコソボの姿を知ってもらうため、私たち大使館はコソボの現状を伝える写真展を開きたいと考えるようになりました。そこで協力してくれることになったのが、九州大学芸術工学府の学生さんたちでした。話し合った結果、若者の目を通して映し出された「今」を伝えるというコンセプトのもと、写真展を開催することになりました。私たちはただ日本でコソボについて紹介するのではなく、交換写真展をすることにし、日本ではコソボで撮影された写真を、コソボでは日本で撮られた写真を展示することにしました。富士フイルム社の協力のもと、使い捨てカメラをコソボの若者30人、日本の若者30人にひとつずつ配布し、各自の日常を撮影してもらいました。

○○○ あらたな出発

そして10月末からの１週間、東京ミッドタウン・デザインハブ内にある九州大学芸術工学府東京サイトで『photo dialogue－9,300km先の日常』と題する写真展を開催することができました。コソボでの写真展も11月中旬に行われ、九大の学生さん４名が実際にコソボまで行き、写真展の準備・運営を、現地のコソボ人学生と共にしてきてくれました。

九大生が作成した写真展のフライヤー

日本での写真展では、非常に多くの方々に足を運んでいただきました。特に、コソボの若者が撮影したということもあり、日本とコソボの間に様々な共通点を見つけることができた写真展となりました。そのような共通点を新たに発見することで、今まではコソボを遠くに感じていた日本人にも、コソボをより身近に感じてもらうことができました。コソボの方では、一般の来館者だけでなく、政府関係者や大使館関係者の方々も写真展を訪れてくれたため、日本の日常を大々的に伝えることも実現しました。

この写真展のプロジェクトには、たくさんの九大の学生さんが携わってくれ、コソボに大きな関心を持ってくれるようになりました。そのことから、この写真展一度きりで今回のコソボへのプロジェクトを終わらせるのではなく、今後も今年の写真展を通じて築かれたコソボとの繋がりを生かして、コソボと日本を結ぶための活動をしていく予定です。

12月には、コソボ外務大臣ホジャイ大臣が訪日され、玄葉大臣との外相会談が行われました。コソボ政府からの閣僚レベルの来日は今回が初めてで、大臣の来日はコソボと日本の外交面において歴史的にも非常に大きな意義があるものであり、私たち大使館にとっても大臣を迎えることは重要な任務でした。

コソボ・日本外相会談の様子（2011年12月）

大使館での勤務を始めてまだ７ケ月と日は浅いですが、様々な重要な場面に立ち会うことができ、非常に有意義な第一年目となりました。このように、自分の専門を生かすことができる就職先に就けたのも、比文で学ぶことができた２年間があったからだと、今改めて感じています。指導をして頂いた先生方には、心から感謝しています。特に指導教員であった松井康浩先生には、研究面だけでなく、就職の面でも大変お世話になりました。松井先生のご指導があったからこそ、修士論文を完成させるという研究面でのゴールを達成することができ、また大使秘書という自分の将来的なキャリアを考える上で、非常に魅力的な仕事に就くことができたと思っています。

比文で指導をして頂いた先生方への感謝の気持ちを忘れずに、大使秘書としてコソボと日本のさらなる関係の発展に尽くしていきたいと思います。比文で過ごした２年間は私の一生の糧となる学びになりました。

比文で得たものと今

松　崎　哲　也
（比較社会文化学府　国際社会文化専攻）

はじめまして。九州大学大学院比文の北研究室卒業の松崎哲也です。まず、このような機会を与えていただきありがとうございます。大学院時代には、北逸郎先生をはじめ九州大学大学院比較社会文化学府の皆さんには大変お世話になりました。本当に感謝しています。どのようなことを書いたらよいのかわからないので、今自分の人生を振り返って思うことを書いてみたいと思います。

「将来の夢は何ですか。」と聞かれて「具体的にこれになりたい。」と迷いなくいえる夢がありますか？私の場合、両親が共に教師という家で生まれた影響か、漠然と中学・高校の夢は「学校の先生になってサッカーを教える。」でした。大学受験の際は、実家から近いことや環境教育という響きに魅力を感じ、福岡教育大学環境情報教育課程を志望し受験しました。大学では化学を専攻し、希土類元素を用いた錯体重合法について研究しました。特にその研究がしたいと望んだわけではなく所謂与えられただけの研究課題でした。正直、毎日研究室に拘束されて実験をするのが苦痛で教授とも何度も言い合いになりました。何のためにこの実験をやっているのかが分からなかったのです。当然、大学４年次の研究生活はあまり楽しいものではありませんでした。

教師になることを夢見ていたものの、大学３年の時、教育実習で「あなたは教員に向いていない」という評価を受け私は人生の中で一番の挫折を味わいました。それまでにも、サッカーのレギュラーの選抜に落ちたり、推薦入試で落ちたりといろいろな挫折があったのですが、このときばかりは本当にどうしてよいかわからないくらいのショックでした。

そして３年生の後半から民間企業への就職活動を始めました。教師という職業に憧れを持ちつつも、違う道もあるのかなと思いスポーツメーカーを中心に面接をしてみましたが、自分の納得する企業からの内定はもらえませんでした。また、就職活動や自己分析をしている中で再び「教師になりたい」という気持ちが強くなっていきました。研究室の先輩から九州大学大学院比較社会文化学府を紹介していただいたのはそんな時でした。「環境問題に興味あるなら来てみないか。」と誘われ、北研究室を訪ねてみました。

「地球温暖化の原因は二酸化炭素濃度の増加ではない。」という先生の主張は私の固定観念を砕き、かわりに「もっと知ってみたい」という気持ちを抱かせました。どうせ教師になるなら専修免許を取得し、他の理科教員とは違う環境問題に詳しい教師になろうと決意し、比文学府の学生となりました。

研究職につきたいと思って入学していない私は、比文の学生の中では異質だったかもしれません。そんな私が比文学府に入って、良かったなと今感じていることをいくつか紹介します。

一つ目は、「自分の研究意義がわかること」です。私の所属していた北研究室では、研究室で取り扱っているテーマの必要性や過去の研究実績、研究分野の位置づけを紹介され、研究テーマと関係する論文を読んだり、講義を受けたりしました。その結果、「なぜこの研究を行う必要があるのか、この研究はまだ誰もやっていないから挑戦する価値がある」と実感でき、最先端の研究に触れることができました。大学の時は、言われたことをする受け身だった私も、大学院で自分が携わった研究の位置がはっきりわかることで自発的に参考書を読んだり、論文を探して勉強したりするようになりました。学部時代に比べると意欲的で有意義な研究生活でしたが、研究そのものは大変だったので、できればもう二度と経験したくありません。でも今となってはいい思い出です。

二つ目は、「ここでしか受けられない授業を体験できたこと」です。学部時代にはフィールド調査や専門家を招いた講義などは受けたことがありませんでした。しかし、大学院に入り、研究材料の岩石や化石を求めて九州各地のフィールドを巡りました。私は、理科に興味はありましたが、自分でハンマーを使って岩石を調べたり、化石を発掘したり、テント泊をしたりした経験はなかったので、何事も目新しく楽しいものでした。また、国立極地研究所の方を招いて南極の話や、東京大学の教授から地球環境につい

○○○ あらたな出発

ての講義を受けることもできました。この比文学府ではそれぞれの専門家と接する機会が多く「地球環境」について広く学べたと思います。とにかく授業が「楽しかった」です。

三つ目は、「ここにしかない出会いがある」です。大学院での研究は一人では成し遂げられなかったと思います。北先生をはじめ大野先生や桑原先生などの指導教員の先生方はもちろんのこと、他の研究室の先生方からの助言や指導を受け、私は修了することができました。また比文の先輩方は非常に優しく、先生方には聞けないこともいろいろ教えていただきました。さらに私は４人の同級生と２人の後輩がおり、彼らと雑談したり、進路のことで話したりしたことがあったからこそ自分だけで不安をため込まずに過ごすことができたのだと思います。これら研究職を目指している人との出会いも学部時代ではありえなかったことの一つでした。本当に皆さんは博識で、お酒が強く、たくましかったです。先輩と同級生で行った卒業旅行で採取した化石たちは私の一生の宝物です。皆さんありがとうございました。

そんな新しい経験ばかりだった大学院を修了した私は今、東京で中学校教師として働いています。奇跡的にも東京都の採用試験に合格することができました。生まれも育ちも福岡の私が東京で先生か…と正直不安でいっぱいでした。校長先生との最初の面談で言われた言葉は、「野球できますか。」でした。サッカーしかしてこなかった私は戸惑いながらも野球部顧問を勤めることになりました。

憧れの教師という職を体験し、１年が経とうとしています。大学院時代、自分は研究者にはなれないなと思っていましたが、今思うと教師も「教育の研究者」なのだなと感じるときがあります。この教材の方が生徒は反応がいいかなとか、この発問の方がいいかもしれないという日々が研修で研究です。この子にはこんな風な声かけをしようなど試行錯誤しながらの毎日で正直つらくなったり、きつくなったりすることも少なくありません。でも、子どもの反応がよいときや、試合に勝って喜んだ姿を見たりすると「あぁ。頑張ってよかった。」と本当に子どもの笑顔に救われる時があります。だから私はこの職に就けて本当に良かったと思っています。野球部の顧問も生徒と一緒に楽しみながらやっています。教師をやってよかったことは「子どもの成長を通して自分も成長できる」ことでしょうか。

さて、いままでの私の学生生活を振り返ってみましが何かしら在校生の皆さんのお役に立つ情報があれば幸いです。

最後に私のモットーを紹介したいと思います。

【自己否定なしに、自己成長なし】

これは、就職活動中に出会った言葉です。自分を常に否定しなければ、どこかに慢心が現れるという意味です。

私は、今まで自分の思い通りにならなかったことを周囲や環境のせいにしがちでした。でもこの言葉に出会い自分を見つめなおし努力を続けることができました。よく自分の意見を絶対に曲げない人もいますが、私はいろいろなことに対応できる柔軟性が大切だと思います。また、何かを達成しても必ず自分を振り返ることを忘れてはいけません。世の中完璧なんてものはそうそうありません。必ず、どこかに改善点があり、それを次回から直していくことで一歩一歩成長するのではないでしょうか。

今から就職する皆さんにはぜひ一つの考えに固執せず、多くの意見に耳を傾けて自分を見つめなおして欲しいと思います。そこには新たな発見があるかもしれません。

偉そうなことを書きましたが、私はまだ社会人一年生。ここからがスタートです。来年は担任をもつことになると思いますし、授業も今よりうまくやらないといけません。私も皆さんに負けないように頑張ります。

写真は卒業旅行で熊本の御所浦に化石発掘にいった時のものです。

社会人大学院生の独白

大　山　智　徳
（日本社会文化専攻・博士後期課程）

みなさん、こんにちは、九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程１年生の大山智徳と言います。よろしくお願いします。私は社会人特別選抜試験を経て博士後期課程に入学することができました。現在51歳です。仕事は大学学部卒業後28年間郵便局一筋です。ですが、出世とは縁がなく未だに無役職です（笑）。職場も住居も広島市です。大学院へは新幹線で月に１回ペースで通っています。郵便局の窓口に出てお客さまと接したり、営業企画などいろいろやりましたが、今は郵便物の区分作業が主な業務です。そんな平凡な郵便局員が九州大学の大学院へ合格したのですからこれは一種の奇跡です。一番驚いているのは私自身です（笑）。ただし、職場の人には私が大学院生であることは秘密にしてあります。これは私自身の密かな快楽でもあります（笑）。

では、なぜこんな私が大学院を受験したのかお話しさせていただきます。それは高校２年生の修学旅行で上高地に行ったときにまでさかのぼります。河童橋から見上げた南アルプスの崇高な山の連なりを水量豊富で透明な美しい梓川の流れの音を聴きながら見上げた瞬間、すべての言語とともに価値観が一挙に崩壊してしまったのです。それから一つ一つの言葉を獲得するために詩を書くようになりました。なんとか登校日数ギリギリで高校を卒業し、未来が見えないままに一年浪人の末、唯一合格した広島にある某私立大学に入学し、社会学を学ぶことになりました。当然ですが心は枯れた状態のままでした。たまたま大学２年生のとき、ドイツ文学の講義でヘルダーリンの『帰郷』という詩を読む機会がありました。この詩には私が上高地で受けた衝撃そのものが言語化してあったのです。崇高で圧倒的な他者を想起させるこの詩を読んで学問に魅了されました。しばらくしてホーフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』を読み、びっくりしました。なんと概念とモノが不一致をきたし、言葉が口の中できのこが砕け散るように砕け散ったとあり、その直前にはある種の神秘体験が書いてあったのです。こうしてドイツ文学にのめりこみました。ヘルダーリン、ホーフマンスタール、カフカ、ムージル、リルケなどで、大学の卒業論文は「文学社会学試論」というもので書き上げました。文学と社会学を接続させようとの大いなる希望をもって。

もう、これでやるべきことはやったという思いで郵便局に就職しました。ところが、４月に就職して半年経った10月に恩師から大学に修士課程ができるから大学院に来ないか、とお誘い電話がありました。ヴィトゲンシュタインも哲学は終わったと言って小学校の教師になったがやり残したことがあったと言い再び大学に戻ってきたんだよ、との言葉とともに。本当にありがたいことです。ですが「三日三月三年」という言葉があるように三年は辛抱しなければ何をやってもダメだ、との信念で丁重にお断りしたことを思い出します。

ようやく仕事に慣れたころから実存的に満たされない自分を強く意識するようになりました。それから昼間は郵便局員として働き、夜は自宅で勉強するという二重の生活が始まりました。こうした生活スタイルはカフカから学びました。働き始めて５年目くらいでしたか、次第に自分の学問レベルがどの程度のものか試したくなり、当時できたばかりの数理社会学会大会で「F. カフカの＜解＞の可能性」という卒論ベースの構造主義的な文学社会学を発表したところ大笑いが何度もおきるという珍事が起きたのです（笑）。その体験が忘れられず、アイデア勝負でいろいろな社会学系学会で発表を繰り返すようになりました。パフォーマンス優先の怖いもの知らずだったのです（汗）。これは知らなかったことなのですが、学会には懇親会がつきものです。そこでいろいろな学者とめぐり合いました。初めての発表から20年、その間、私が凄いなあと思った社会学者の院ゼミに腕試しに参加したり、学会発表も40回近くになっていました。今から考えると極めて無謀な独学による研究スタイルを確立していました。独学の魅力はハイリスクだけどハイリターンな研究が続けることができるという点です。厳密には生計手段とは別だからこそできる、アマチュアだからこそできる研究があることに気づきました。そこでふと思い浮かんだのが＜ヤクザ＞（＝ヤク

○○○ 社会人院生コーナー

ザ的なる存在）でした。誰もが知っているのに社会学者が語りたがらない存在です。調べると50年近く前に卓越した研究がなされて以来､その言説は封印されていたのです。

直感的にこの言説の不在、タブーには社会学や市民社会を破壊する何かがあると感じたのです。それまで記号論ベースで文学社会学や身体論を論じてきたのですが、それからは＜ヤクザ＞をめぐる研究を一人で開始しました。インタビューの途中でいろいろ怖い目にもあいましたがそれはそれで私の運命だと感じるようになっていました。学会発表をしているうちに学会や懇親会､あるいは院ゼミで｢ヤクザの大山さん」と言われたり、紹介されたりするのでその都度､｢ヤクザ研究をしている大山です｡」と訂正するような場面も増えていきました（笑)。しかし、いつの間にかアカデミズムに所属機関がない私にブレーキをかけてくれる人がいなくなっていたのです・・・。そんなとき、ある学会の懇親会で「そんなにヤクザが好きならヤクザになれば？」と言われて研究対象との距離にハッと気づかされたのです。たぶん、その言葉が大学院受験の動機だと思います。アカデミズムの中に再び戻ろう、いや戻ってアカデミズムの作法を身につけようと考え始めたのです。たぶん、その言葉を発した先生はそんなことは忘れておられると思いますがこの場を借りてあらためてお礼を申し上げます。

それからは私を理解し､さらに自由な精神性を発揮でき、なおかつ仕事も続けられる大学院探しが始まりました。修士号は持っていませんので仕事を辞めて修士課程に入りなおすか、進学をあきらめるかどちらかだなあと考えているうちにある研究会がきっかけである大学院ゼミに参加させていただけることになりました。その晩、一緒に先生や院ゼミ生と飲みながらいろいろと話をしていると「大山さんは査読付きの論文がありますか？」と先生に聞かれたので何本かあります、と答えたら「それなら修士号なしでも博士後期課程を受けることができるんじゃないかなあ、論文博士を目指す方法もあるよ｡」と教えてくださったのです。そういえば、プロ野球の巨人の桑田真澄投手は大学は卒業していないけど実績で大学卒業同等以上程度の実力ありと認められて飛び級で大学院へ入学したと聞いたことを思い出し、いろいろ大学院の受験資格についてＨＰを調べるようになりました。最終的に九州大学大学院を選択し、連絡をして許可をいただいて一度、院ゼミに参加させていただきました。これが運命を決めた院ゼミになりました。三人の先生方による「総合演習」が非常に魅力的でした。こしかない！と決断するには時間はかかりませんでした。「総合演習」が終わったときにはすでに気分は九大院生でした（笑)。これまで書いてきたのですでにおわかりの方もおられると思いますが、私は現象学から構造主義、そして記号論、さらにフーコー体験を経てデリダ、ドゥルーズを読みながら研究を進めてきました。ところがこうした学問の系譜だけでは新しい言説が生まれないような気分に襲われるようになっていました。＜ヤクザ＞を研究するにあたって独自の言説を生むために私に必要なのは数学と論理学だと気づいたのです。構造主義誕生にはレヴィ＝ストロースの文化人類学的直感とヴェイユの数学的直感が交差したからではないかというのが私の理解です。たぶん、新しい知というのは完全に外でもなく、完全に内でもない境界あたりから生まれるような予感があります。そこで私にとって馴染み深い現象学やポストモダンの言説とは遠く離れているように思える比喩ではない数学や論理学に詳しい数理社会学者に師事しようと決めました。帰宅後、九大のＨＰで受験資格を見ると修士号をもっていなくても事前審査だけは受験できることを発見し、とりあえず必要書類を準備し、郵送しました。なにせ、この期限があと３日だったのです（汗)。なんとか受験資格を得たいとドキドキしばがら結果を待っていたら大学院係から「教授会用にこれまでの論文業績を時系列にしてＡ４用紙１枚にまとめてできるだけ早くメールして欲しい｡」との電話があり、これまた一夜でまとめてパソコンメールで送信しました。すると一週間くらいして「受験資格あり」との内容の書留が届きました。あとは研究計画書をつくり、主要論文要旨をまとめ、自信満々に口述試験に臨みました。ところがあま

第122回日本社会分析学会例会にて
（於：香川大学，2011年12月17日）

りに厳しい質問が続いたため緊張のあまり血圧は異常に上がり、心臓はバクバク、寒いはずなのに汗は流れるわ、思考はまとまらないわの大変な試験でしたがなんとか終了。２ヶ月くらいして「合格通知書」が来ました。なんという幸運！私は気づきませんでしたが独学だとかなり突っ張っていたのでしょう、自然と涙がわいてきて畳の上に正座し、「合格通知書」に手を合わせました。そのときに届いた「合格通知書」は額に入れ、友人から今の正直な気持ちを書いて額の裏側に入れて学位が取れたらその紙を読み直せばいいよ、とのアドバイスをいただき、今、机の前の壁にかけてあります。

さて、入学から半年が経って私の学問的環境は抜群によくなりました。ただ、大学院生同士での研究会があるはずなのに参加できないのが残念ですがいまはスカイプもありますし、もっと工夫すればもっといい学問環境になると思います。

最後になりましたが口述試験のときに提出した博士論文の題名はフーコーを意識した「ヤクザの誕生」というものでした。なぜそんな題名で合格したのか今もって不思議ですが自由でのびのびと学問をさせていただける九州大学ならではの学風のおかげだと感謝しています。上高地体験以降、私自身に内在する美に対する神秘主義的傾向を活かしつつ、私にしか感じ得ない社会的なるモノを＜ヤクザ＞を導入することで論理的に展開した博士論文に挑戦したいと思います。これまでどおり二重の生活－学問と仕事－を続けながら。

○○○ 社会人院生コーナー

社会人から学生へ、そしてまた学生から社会人へ―人生の繰り返し―

金　　紅　梅
（日本社会文化専攻・修士課程）

（最近、就職活動用に撮った写真です。普段は他に写真を撮る機会がないもので・・・）

私は現在九州大学院比較社会文化学府の修士課程で勉強しています。今年29歳で、修士課程の留学生の中では一番年上でないかなと思います。実際大学卒業したのも６年前のことでした。では、なぜ今の年齢になって、私は今更、留学の道を目指すことになったのかを語らせて頂こうと思います。

最初に留学のことを考えたのは、高校三年生の時でした。大学進学が唯一の道だと思い込み、勉強を続けていたときに、日本へ留学するという道もあることを知りました。同級生の誰それはもう留学準備を行っているという噂が飛び交っていました。私も、その時、希望の大学に受からなかったら、留学したいと両親に相談しましたが、お母さんは、「あなたには、中国の大学に進学して自分の未来を開いて行く道しかありません」と宣告されました。再び留学のことを真剣に考え、それを実現したのはおよそ10年後のことでした。

私は、中学生の時から、第一外国語として、日本語を勉強してきました。

大学卒業後、日系企業を選んだのは、自然の流れでした。しかし長年日本語を勉強して来ましたが、実際には一言も話せなかったので、言語能力があまり求められない事務系の仕事しかできませんでした。最初に就職した日系企業は阪田インクという会社でした。一年間の事務仕事を経て、日本からの駐在社員とのコミュニケーションがたびたびある中で、日本語もある程度話せるようになりました。しかし、その時自分がやりたいのは営業アシスタントではなく、営業でしたし、さらには、近い将来には大手企業で働きたいという願望もあったので、松下電器機電（中国）有限公司という会社に転職しました。日本語も上達していないまま、私は運良く希望の職場で働き始めました。始めは一般常識もわからず、仕事の流れもよく理解できない中で苦労し、「指導」を受けたこともしばしばありました。黙々と仕事をやり続ける中で、やっと仕事のルールを覚え、一人で営業先を回れるようになった入社２年目の時でした。担当するお客様が日本でグローバル会議を毎月開くことになり、私も運よくこの会議に参加する機会を与えてもらいました。人生で初めて日本という国に足を踏み入れまして、自分が想像した以上に整然とし、国民一人一人がルール通りに動いている姿に少し驚きました。グローバルミーティングに参加して、自分は言語上の壁だけではなく、組織に対した意識、責任感、気持ちなどが全く違うことを痛感しました。それにしたがって「本社社員になりたい！大きい仕事を任せられたい！」という意欲が、ますます強くなりました。また、現地で管理職として活躍している同僚はほぼ日本留学経験の持ち主であり、自分がもっと上のステップに上がるには、日本の大学でさらに勉強し、日本の社会に馴染む必要があると思いました。そして私は決して容易ではない日本への留学を決意しました。

大学院での勉強は簡単なことではないです。今までの勉強とは全く勝手が違いますし、２年間で修士論文を完成するのは私にとって、非常に困難、また多少無理がある作業だとさえ思えます。しかし、たくさんの本を読みながら、考えを整理したり、自分のことをじっくりと考えたりするのも今しかできないと思っています。だからこそ、今はつらくて、かつ幸せな毎日ではあります。

大学院での生活も後一年しか残っていません。一年後は再び社会に出て、会社人という姿で未来に向き合って走らなければなりません。この貴重な、幸せな時を悔いがないように過ごして行きたいと思います。

平成23年度修士論文題目一覧
日本社会文化専攻

学位番号	学位の種類	（フリガナ） 氏　　名	修　士　論　文　題　目
779	修士（比較社会文化）	王（オウ）　雪梅（セツバイ）	対中進出日系企業の経営「現地化」―人材問題の視点から
780	修士（比較社会文化）	韓（カン）　雪（セツ）	武田泰淳『秋風秋雨人を愁殺す』論
781	修士（比較社会文化）	邱（キュウ）　菲（ヒ）	日本の太陽光発電政策の歴史的評価
782	修士（比較社会文化）	曲（キョク）　鵬（ホウ）	近世における武士階層の思想に関する研究―『葉隠』を素材として
783	修士（比較社会文化）	金（キン）　月（ゲツ）	日本皆保険制度の歴史過程と中国都市部医療保障制度への示唆
784	修士（比較社会文化）	金（キン）　梅香（バイコウ）	中国人日本語学習者における複合動詞の習得―開始の意味を表す「～出す」と「～始める」を中心に
785	修士（比較社会文化）	栗崎（クリサキ）　愛子（アイコ）	「身體」で描く『上海』の世界―新感覚派・横光利一の修辞法―
786	修士（比較社会文化）	呉（ゴ）　海蘭（カイラン）	依頼に対する断り表現の日中韓対照研究―日本語母語話者と日本語学習者の事例から
787	修士（比較社会文化）	康（コウ）　春梅（シュンバイ）	「動詞述語＋～ばかりだ」に関する基礎的研究
788	修士（比較社会文化）	石畑（コクハタ）　匡基（マサキ）	戦国～豊臣期における毛利氏の研究
789	修士（比較社会文化）	柴（サイ）　灼（シャク）	日中両言語における同形語の第二言語習得―中国語母語話者の日本語習得を対象にして―
790	修士（比較社会文化）	坂本（サカモト）　直美（ナオミ）	日本語における女性の断り談話の構造分析～日中対照談話分析に基づいて～
791	修士（比較社会文化）	朱（シュ）　承方（ショウホウ）	中国人観光客の訪日旅行の実態と今後の集客戦略に関する研究―台湾人観光客との比較を通じて
792	修士（比較社会文化）	祝（シュク）　天驕（テンキョウ）	日本語の自発態の機能について―受動態と可能態との比較を通して―

793	修士（比較社会文化）	孫（ソン） 艶（エン）	地方都市における中国人元留学生の就業状況と継続意志―福岡県を事例にして―
794	修士（比較社会文化）	瀧本（タキモト） 朋樹（トモキ）	船舶における安全管理の検討―コミュニケーションの視点から―
795	修士（比較社会文化）	田畑（タバタ） 春香（ハルカ）	「葬儀」を通してみた近世大名家の政治性―長州藩毛利家を題材に―
797	修士（比較社会文化）	張（チョウ） 国秀（コクシュウ）	中国における再生可能エネルギーの利用についての調査―新疆ウイグル自治区の利用状況を中心に―
798	修士（比較社会文化）	陳（チン） 竹（チク）	谷崎潤一郎の『細雪』と林語堂の『北京の日』の比較研究
799	修士（比較社会文化）	鄭（テイ） 阿曼（アマン）	清朝同治期における対日政策―日清修好条規締結交渉を中心に―
800	修士（比較社会文化）	程（テイ） 穎（エイ）	日本語の「感情動詞」と中国語の「心理動詞」の対照研究
801	修士（比較社会文化）	永嶋（ナガシマ） 洋一（ヨウイチ）	「満州国」期の「朝鮮族」による日本語教育について
802	修士（比較社会文化）	任（ニン） 旭（キョク）	中国におけるコールドチェーン構築に向けた課題に関する研究―日中食品スーパーの比較分析
803	修士（比較社会文化）	パウデル（パウデル バドリナート） BN	Nepalese Student in Japan ; Problems and Prospects
804	修士（比較社会文化）	白（ハク） 岩（ガン）	阜新炭鉱における労務管理史の研究（1940－1944）―労働力編成・労働力移動・労働条件を中心に―
805	修士（比較社会文化）	長谷川（ハセガワ） 順子（ジュンコ）	日本語中級読解技能の効果的な開発に向けて―ジャンル認識，フォーマル・スキーマ，読解ストラテジー活用の視点から―
806	修士（比較社会文化）	福井（フクイ） 崇郎（タカオ）	持続可能な政治的・社会的連帯の探求―伝統的地域共同体の再検討―
807	修士（比較社会文化）	福元（フクモト） 千秋（チアキ）	異文化下で直面したトラブルとそれをどのように乗り越えたか―日本在住の留学生の調査から
808	修士（比較社会文化）	二見（フタミ） 麻友（マユ）	沖縄における本土化と内地化によるアイデンティティ形成―沖縄の紋章の考察により―

809	修士（比較社会文化）	ホウ　ギョク カ 方　玉 華	高学歴化する中国における大学カリキュラムの問題
810	修士（理　　学）	ボルジキン　タ ナー 包　塔 娜	中国における風力発電産業の現状と課題―内モンゴルのケーススタディを通じた考察
811	修士（理　　学）	モリ タ マキコ 森 田 満希子	日本の新エネルギー開発の社会史的研究―水素エネルギーを中心として
812	修士（比較社会文化）	ヨウ ラン デン 陽 藍 田	中国の「西部大開発」政策における中小都市の実態と課題―南江県をめぐる発展及び貧富格差の解消について
813	修士（比較社会文化）	リ カ オン 李 佳 音	中日接触場面の初対面会話における話題選択―中国語母語場面との対照より―
814	修士（比較社会文化）	リ ケイ 李 慧	条件表現の日中対照研究―「たら」「なら」とその対訳語を中心に
815	修士（比較社会文化）	リ ビ レイ 李 美 玲	芥川龍之介と中国―「南京の基督」と「湖南の扇」をめぐって
816	修士（比較社会文化）	リュウ ハク クン 劉 柏 君	吉林省自動車産業の集積現状と発展－長春市を中心として
827	修士（比較社会文化）	チョウ ビ エイ 張 美 英	親しい関係における感謝表現の日韓対照研究

国際社会文化専攻

学位番号	学位の種類	（フリガナ） 氏　　名	修　士　論　文　題　目
796	修士（比較社会文化）	チョ イン シュウ 趙 寅 秋	擬音語の擬態語化に関する中日対照研究―日本語における「ABAB」型オノマトペと中国語における「ABB」型オノマトペを中心に
817	修士（理　　学）	イシ ワタ フカ シ 石 綿 深 志	ジャコウアゲハ（鱗翅目：アゲハチョウ科）卵への広食性タマゴコバチ属（膜翅目：タマゴコバチ科）２種の寄主選択
818	修士（比較社会文化）	ウ コウ シュン 于 甲 春	周作人の“複訳”観―ギリシャ文学の翻訳を中心として
819	修士（比較社会文化）	カワ リュウ レ ミ 川 龍 麗 美	日本語英語学習者による認知的手法を用いた前置詞 on の学習に関する研究

○○○ 大学院データブック

820	修士（比較社会文化）	金（キム） 柱英（ジュ ヨン）	悲哀の使命―新渡戸稲造の武士道的キリスト教思想
821	修士（理　　学）	黒崎（クロサキ） 伊織（イオリ）	九州に分布する鳥巣式石灰岩の堆積学的研究
822	修士（比較社会文化）	小谷（コタニ） 遥（ハルカ）	Edith Whartonの *The House of Mirth* における女性像
823	修士（比較社会文化）	島居（シマイ） 佳江（ヨシエ）	トールキンのカトリシズム
824	修士（比較社会文化）	徐（ジョ） 文慧（ブンケイ）	形容詞の名詞化接尾辞に関する日韓対照研究―コーパスの実例を中心に―
825	修士（比較社会文化）	趙（チョウ） 慧（ケイ）	吉野作造の中国観―基本思想と国際観の変化
826	修士（比較社会文化）	張（チョウ） 竹（タケ）	日中関係における民間交流の役割とその限界―中野良子と福原愛をケースとして
828	修士（比較社会文化）	陶（トウ） 夢（ム）	日本と中国の家庭でのあいさつ行動についての日中比較研究
829	修士（比較社会文化）	林（ハヤシ） 美由紀（ミユキ）	日英語ライティングにおける文章構造についての実証的研究―九州大学学部生の議論的文章と説明的文章を対象として―
830	修士（理　　学）	藤井（フジイ） 智久（トモヒサ）	Influences of gall size on gall inducer – parasitoid interactions
831	修士（比較社会文化）	藤田（フジタ） 花衣（ハナエ）	現代朝鮮語の程度副詞に関する研究―比較を表す程度副詞を中心に―
832	修士（比較社会文化）	ホウ 博（ハク）	現代日本マンガの心理表現をめぐる考察―少女マンガを中心に
833	修士（比較社会文化）	武藤（ムトウ） 優（ユウ）	『1930年代の帝国日本における朝鮮イメージの受容』―京城放送局制作番組を中心に―
834	修士（理　　学）	山下（ヤマシタ） 剛史（タカフミ）	北大西洋堆積物の水銀含有量変動―氷床拡大縮小現象の新化学指標―

九州大学

比文・言文研究教育棟

伊都キャンパスセンターゾーン

広報情報化推進委員会よりおしらせ

『クロスオーバー』に寄稿された原稿の著作権は著者が有するものとする。ただし比較社会文化学府（広報・情報化推進委員会）は広報活動の一環としてそれら著作物をウェブサイト等で公開する権利を保有する。

（2010.10.08 第 2 回広報・情報化推進委員会決定、10.22 学府教授会報告）

編 集 後 記

皆様のご尽力のおかげでクロスオーバー第31号をお届けすることができました。お忙しい中ご執筆をいただいた比文の先生方、在学生、卒業生の皆様、そしてコロニー印刷のスタッフの方々にお礼申し上げます。

今号でも比文学府の諸先生方、在学生、卒業生の方々の多岐にわたる活躍が紹介されています。活動分野の幅広さもさることながら、その活躍が世界各地にわたることを嬉しく感じました。在学中の方はもちろん、新しく比文に入学する学生のみなさんがひとりでも多く手に取ってご覧いただければと思います（楠見）。

SCSのロゴの説明

ＳＣＳ（エス・シー・エス）は、九州大学大学院比較社会文化学府の英文名称 Graduate School of Social and Cultural Studies の略称です。ロゴはＳＣＳを図案化したものです。考案者は「二羽の鴨に見える」と主張していますが、「一羽にしか見えない」と言う人もいます。しかし家鴨ではないという点では、私たちの意見は一致しています。裏庭の囲いのなかで餌をもらって外の世界を知らずにいる家鴨ではなく、越境する渡り鳥である鴨こそが、私たちのめざす新しい学府にふさわしいと考えているからです。

広報情報化委員会　クロスオーバー編集担当：小山内康人、楠見淳子

GRADUATE SCHOOL OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES

発 行 者　九州大学大学院比較社会文化学府
発行年月　2012年　3月

〒819-0395　福岡市西区元岡744
TEL：092(802)5786・5787
FAX：092(802)5785
ホームページ：http://scs.kyushu-u.ac.jp/